

〔遊仙窟〕薄媚狂雞三更唱曉遂則被衣對坐泣淚相看

〔倭訓栞前編十一〕しほたる 源氏にいたうしほたれたまふと見えたり遊仙窟に泣淚をよみ齋志

宮式に哭稱鹽垂と見えたり藻鹽をたるよりいふ成べし

〔皇大神宮儀式帳〕亦種々乃事忌定給支鳴乎鹽垂止云

〔延喜式五齋宮〕凡忌詞中外七言中哭稱鹽垂

〔源氏物語十〕みかど御うごきて別の御くしたてまつり給ふいとあはれにてしほたれさせ給ひ

ぬ

〔日本書紀二神代〕天稚彥之妻下照姬哭泣悲哀聲達于天是時天國玉聞其哭聲ナラフ則知夫天稚彥已死

〔日本書紀十五〕六年是秋日鷹吉士被遣後有女人居于難波御津哭之曰於母亦兄於吾亦兄弱草吾

夫何怜矣略○註 哭聲甚哀令人斷腸

〔日本靈異記上〕嬰兒驚所擒以後國得逢父緣第九

家主答言中○中 鷺擒嬰兒從西而來落巢養雛慄啼彼雛望之驚恐不喙余聞啼音自巢取下育女子是

也略○中

啼略也

〔新撰字鏡欠〕歔歔上喜居反出氣也濕吹也下虛既反二合涕泣貌泣餘聲也悲也佐久利

〔古今和歌六帖四〕戀四ざふのおもひ

君によりよ、よ、よ、とよ、よ、とよ、よ、とねをのみぞなくよ、よ、よ、よ、と

〔蜻蛉日記中〕上 なをいとしにかたしいかゝはせんかたちをかへてよを思ひはなるやと心見

んとかたらへばまたふかくもあらぬなれどいみじうさくりもよ、となきてさなりたまは、

まろもほうしになりてこそあらめなにせんにかはよにもまじろはんとていみじくよ、とな